

ヤマゴモリノススメ

ヤシロ

※本作品は刀剣乱舞-ONLINE-の非公式ファンブックです

※山伏国広と女審神者のカップリング要素を含みます

目 次

山の彼方の	9
ないしょごと	14
しのぶれど	24
花冷えの雨落ちて	30
蒼天揺るる	39
みずみずしきは	49
嵐のごとく	56
無言の戒め	67
まじないをかける	79
青鈍色の空に泣く	88
恋は慈愛の一手から	99
山籠もりの許可を。	109
氷雨の指先	120

山の彼方の
あなた

青く晴れて、雲も退く空だった。

審神者は、縁側でぐだぐだと暇を持て余していた。庭ではしゃぐ遊戯にも、町に繰り出す喧騒にも混じれず、春の陽気の下でぼんやりとしていたのだった。

一人取り残された理由は、怪我をしていたからだ。そうたいしたものではないのだが、先日転んだ際に足首を捻挫してしまい、屋敷内ならともかく、外へ出ていくのは少し骨だった。

そんな折、山伏国広から声を掛けられたのだ。

「――主殿、山へ行かぬか？」

そんなわけで、審神者は山へと来ている。

何かといえはすぐ山籠もりだと言いつ山伏に審神者も実は呆れていたのだが、考えなしに誘ったのではなく、山伏は背負子しよこのようなものを用意していた。

背中合わせになるようにそれに腰掛けて身体を固定すれば、あとは足を使わなくてもた

だ運ばれていればいいのだった。

山伏の背に揺られているとまるで、最後尾の車輛から景色を眺めるようだった。ゆらゆらと揺れながら、後ろから前へと風景が流れていくのだ。

山の桜は、都会に植えられたものとは違って整然としてはいない。こちらに固まり、あちらに固まり、桜色の群れはあちこちに出没している。審神者の知る白に近い薄桃色だけではなく、淡紅色、紅色、いっそ紫に近いものまで、天へと貪欲に枝を伸ばしているのだ。た。

色濃い生命力にあてられ、審神者はほうと息を吐く。

それに呼応するように山伏が声を掛けた。

「吉野の千本桜とはいかぬが、ここの桜もなかなか見ものであろう」

そうだね、と審神者は素直に返す。

こんな機会でもなければ、山伏と二人で山へ来たりはしなかっただろう。なにしろ審神者は、山伏の誘いに乗れば修行に巻き込まれると思っていたのだから。今回も、足腰を鍛えるための重しにされているだけではないかと、疑っているほどだった。

山腹を登り、桜の下のちょうどよく平たい地面に審神者は下ろされた。山伏もその隣で足を崩すようにする。

座り込んだ地点から眺めると、頭上は一面の桜だった。桜の枝が天を、隠すように覆っている。

——そのとき、一陣の風が吹き抜けた。

その怒号を受け、桜の花びらが、競うように枝から舞い上がる。

それは、白く儚い瞬きなどではなかった。

凄烈な光だった。轟々ととどろく淡紅色の渦だった。

その鮮烈さに、審神者は束の間呼吸も忘れた。

「……すごい」

それだけの、平凡な感想しか口にはできなかった。

「この散りざまは、命を燃しているのである」

——と、そんなことを山伏は言う。

「生きとし生けるものは今を限りと命を燃やすのだ」

寿命の長い木々といえども、花と実はその都度生まれ、その都度死すのである。命はみな、火なのだ。漁火のように、燃えて己を示すのだ。

その言葉はなぜか、すっと審神者の胸に収まった。大仰な説教のようにしか聞こえないその言葉は、山の中にいると素直に受け取れるのだった。

あちこちに色濃い気配がしている所せ為せいかもしれない。冬眠から覚めた生き物のうごめきを感じられ、青草の臭いが鼻をつき、鮮やかな花が咲き乱れ、子兎の後ろ脚がくさむら叢くさむらを揺らすこの春においては。

そうして、審神者は、山伏が山を好む理由がふと腑に落ちた気がした。

「——山伏は、生きているものが好きなんだね」

命を持たぬ刀剣だからこそ、命に惹かれるのだろうか。死のような概念は存在するとはいえ、命を紡ぐ行為を知らぬ刀剣は、生の輪に入ることとはできない。

たんとこ掌たんとこの上で、命をずっと眺めていることしかできないのだ。

審神者の思いに応えるように、山伏の声はすうっと深くなる。

「我らも、この戦いの間は今を生きている」

この戦いの間は、命を燃している。血を流し、想いを託し、存亡を懸け、人間と同じ道の先を見つめることができる。

「——終わらばただの美術品よ」

カカカと山伏は笑った。

その和やかな笑みと口許のわずかな陰りに、審神者は目をひらかれる思いがした。

——山伏とはこのような、繊細さを隠し持った刀剣であったのか。

ぐるりと、世界がひっくり返ったようだった。

修行だの筋肉だの豪快な笑い声だの、山伏を構成するものはどこか、力業ちからわざのような気がしていた。悩みすらも強引に捻じ伏せる力を持っているのだと思っていた。

でも、そうではないのだ。

悩みも哀しみも、深くまで見通した末の豪快さであったのだ。痛みを感じないのではなく、痛みを知っていて見せないのだ。

——そんなことが、なぜだか一時に理解いちどきされた。

どうと吹いた風が、どうと胸の内を押す。

花吹雪と木漏れ日が、山伏の静かな笑みに降り注いでいる。

「……そうかあ」

そうか、とそれだけを審神者は頷いた。

うむ、と山伏もそれだけを答えた。

山伏は、頭上の桜を振り仰ぐ。

「まことに見事な桜である。この景色を、主殿に見せたかったのだ」

ニカツと笑う山伏に、審神者もこぼれるような笑みを返したのだった。

一緒に見たいと思っていてくれたなら光栄だと、そんなことを感じながら。